荒木光太郎文書 720

16

帝国陸軍　日本々土防衛

起案（藤原）

（五一〇一二二四一一）

荒木光太郎文書 720

記述上の御斷りと御願ひ

此部は實施と結果が伴はない計畫や判斷等が主體を成し內容が無味乾燥な上に各節の連接性が之しい所を下手な纏め方と拙い作文で書き流しましたから出來上つた想は自分にも不滿なものになりましたが敢へず印刷致しました。

御指教を待て訂正補しません。御讀を願ひます。修文、誤字、脫字は全く出來て居ません。

尙海軍側の資料は大前、千早兩氏の御配意に依り概ね入れ得たと思ひますが陸軍に偏した所が多いのではないかと思ひますし又陸軍の關係事項に於ても私の經驗上西九州を偏重し或は第二總軍以下の司令部の主觀に捉はれて大本營の立場を缺にして居る點が有るのでないかと懸念して居ます　御訂正を願ひます。

一、目次の變更

イ、前文を略しました。前文に書かんとした

「一九四五年初頭迄の本土防衛組織の變遷」を第一節として纏めました。從つて指示に依る目次の第一節以下は第二節以下に繰下つて居ます。

ロ、「本土防衛に對する準備」に附記する如く追加された「水中を含む各節の關係項に挿入し其他は別に起草せられつゝある「特攻」の部に依存することゝ致しました。

3. 第四節豫定の「指揮組織」は第三節の一項として記述致しました

4. 第八節に一九四五年四月決定された「決號作戰準備要綱」の要點を記述した。

5. 第九節豫定の「海上輸送の杜絕」は大井氏擔任の「脅威下の海上交通」に總括記述して戴く樣に御願ひし又此頃（一九四五年五、六月）の海上輸送の狀況は次節經濟情勢の所に記述することと致しました。其の代り一九四五年の「防空作戰の一般經過と空襲被害の概況」を一節に纏め次節への發展に備へることゝ致しま

荒木光太郎文書 720

した。

二、記述上の着意

1. 此部の無味乾燥性を緩和する為計畫、判斷を咀嚼し解説的に取扱ひ或は要點の摘録に止めました。

2. 本土防衛の特性上總力戰的觀點を特に強く着意致しました。

3. 計畫、判斷の結果を見るに至らず殘缺になりましたので當時問題となり懸念された事項を若干捨つて讀者の批判の示唆たらしめる着意を以て挿入致しました。私の記憶が加味されて居ますので主觀に偏して居はしないかと心配して居ます。

4. 第二章に於て冒頭に本土全域の防衛作戰準備、計畫を記述すべきかと思ひましたが計畫の目次通りに關東と九州を重點とし又其の中でも主決戰方面を主軸として記述致しました。全般的事項又は九州、關東共通の事項は第二節の「九州方面の作戰」に記述し第三節「關東方面の作戰」は特異の點を重視して書きました。

第二節の「九州方面の作戰」中第三項　の南部九州地上作戰計畫中各地區別の計畫は全部略し得る如く謙め其の前後を記述致しました。

5. 硫黄島及び沖縄の作戰は此の歴史の對象としては簡約に取扱ふべきかと考へましたが一方日本側としては折角の機會に此作戰を相當詳しく殘す必要を考慮し一應稍〻詳しく纏めました。

大和特攻隊の記述は「エピソード」的なものですから採否を研究して載きます。

6. 本部の記述は第三第五特に第五部と内容と時間的地域的に緊密なる連接を必要としますが一應第四部の主觀的見地から書きました其の調節に就き御指示を願ひます。

三、資料に就て

資料は第一復員局提出の各種資料と海軍側提供のものを主体とし之に個人から得たもの　私の記憶を加味致しました。

資料の檢討は今後の研究に俟つべきものが多々あります。

荒木光太郎文書 720

目次

第一章　本土防備組織
第一節　一九四五年初頭に至る迄の本土防備組織の發展經緯
一、開戦初期の空虚なる防空組織
二、米機動艦隊とB29の脅威に対する防空対策
三、「サイパン」の失陥と本土地上防備対策
第二節　一九四五年初頭日本に於ける一般情勢
第三節　本土防備に関する新情勢
一、大本營の作戦計畫大綱
二、四十個師団の動員を骨幹とする本土兵備の展案
三、本土兵備運用の腹案
第四節　一九四五年初頭に本營命令と指揮組織
一、大本營命令
二、指揮組織
第五節　硫黄島の防禦
一、戦略的地位と米軍の動向
二、二月初旬頃の硫黄島の防備
三、硫黄島防禦戦闘の經過
イ、米軍の上陸
ロ、主陣地帯に於ける戦闘
ハ、攻撃の戦闘
第六節　沖縄作戦
一、沖縄群島の地位
二、沖縄本島の作戦準備
三、作戦計畫
イ、大本營の計畫
ロ、本島守備隊の防禦計畫と兵力部署
ハ、航空部隊の作戦と兵力運用の計畫

荒木光太郎文書 720

四、初期に於ける作戦経過

1. 本土本島空襲直前の情況

2. 我が航空作戦の發動

五、本島を繞る攻防の死闘

1. 初期の地上戦闘

2. 其の後の地上軍の防禦戦闘

A 守備隊の反撃

B 百里の南洛と後郷地に於ける最後の戦闘

3. 航空作戦の経過

六、戦艦大和の出撃

六、本土決戦の戦略へ

第七節　指揮組織の改編

一、指揮組織改編に至れる

二、新指揮組織と任務

1. 陸軍部隊

A 指揮組織

B 各總軍司令官の任務

2. 海軍部隊

A 指揮組織

B 海軍總隊司令長官の任務

三、航空兵力の改編

第八節　一九四五年四月策定されたる本土作戦計畫

一、作戦要綱

二、集中計畫要綱

三、陸海軍間の作戦指揮防空

第九節　一九四五年に於ける我が航空作戦と空襲の被害狀況（第五部の空襲被害と纏めて此處に挿入せり）

一、春季の防空作戦と被害狀況

荒木光太郎文書 720

二、防空作戦方針の變更
三、終戦時に於ける空襲被害の概況

第十節　海上交通の杜絶（大東亜戦争第三部に挿入する如く協定しあり）

第十一節　一九四五年五、六月頃に於ける日本の人的戦力と経済情勢

一、人的戦力
1. 民心動向の暗影
2. 人的資源

二、経済情勢
1. 本土作戦成否の關鍵を握る輸送力及通信
A 海上輸送力
B 鐵道輸送力
C 陸路を形成する主上小輸送力と港灣荷役力
D 通信機能
2. 基礎産業
A 製鋼
B 石炭難
C 大陸鹽
D 燃料
E「アルミニウム」其他
3. 重要兵器の生産
4. 食糧事情
5. 激化する「インフレ」傾向

三、政府及大本營の國民指導と經濟對策
1. 國民指導
2. 經濟緊急對策

第十二節　米軍の採るべき戦略判斷

荒木光太郎文書 720

第二章　九州及朝東正戦（十月十五日）

第一節　米軍攻撃計畫に関する判断（附圖添附）

一、米海空軍攻撃の様相

二、九州、四國方面に對する攻撃の判断

三、關東方面に對する攻撃の判断

四、其の他の方面に對する作戦の概況

1. 日本々州分断作戦

2. 津軽海峡制圧作戦

第二節　九州作戦

一、一九四五年五月頃迄の九州方面作戦準備の狀況

1. 地上戦備の概況

2. 航空及海上作戦準備

二、本土決戦方式確立の經緯

三、九州地上決戦の計畫

1. 一般要領

2. 南部九州決戦計畫の概要

3. 北部九州の決戦計畫の概要

4. 作戦準備の進捗

四、九州方面航空作戦の計畫

1. 陸海軍中央協定の骨子

2. 中央協定に基く九州方面航空作戦の構想

五、九州方面海上作戦計畫の骨子

1. 海上部隊の作戦構想

2. 海上特攻部隊の作戦計畫

荒木光太郎文書 720

第三節　關東防禦作戰

一、一九四五年五月頃迄の作戰準備の狀況

イ、地上戰備の概況

ロ、航空及海上作戰準備

二、地上決戰の計畫

イ、一般要領

ロ、作戰準備の遲滯

三、航空作戰計畫

四、海上作戰計畫の骨子

五、關東決戰と九州決戰の關係に就て

第四節　東京防禦

一、東京防衛軍の新設と與へられたる任務

二、至難なる東京防禦の計畫

三、遷都の問題（松代の寫眞添附）

荒木光太郎文書 720

第一章　本土防衛組織

第一節　一九四五年初頭に至る迄の本土防衛組織の發展經緯

一九四五年一月「ルソン」島に戰火擴大し米軍の爲東支那海を制扼せられて日本は本土と南方勢力圏と孤立狀態となり大陸との交通も困難を增して來た。一九四五年二月十六日米軍戰略爆撃群及び米軍機動艦隊艦載機群が本土に對する攻撃を本格的に開始するに及んで前述本土の孤立と相俟つて日本の生産は急角度に衰微し初めた。小笠原群島に對する米軍の積極的動向は觀者と為つて來た。而も一九四四年十一月九日「ソ」聯首相「スターリン」が「日本を侵略國と見做す」旨聲明し參戰の用意を示唆するに至つたので北邊の防衛も重大化して來た。

一九四五年初頭本土を繞る情勢は早くも本土に對する聯合軍特に米軍の決戰的反攻の段階に突入した。

翻〻日本の本土防衛組織の發展經緯を回顧して見ると

一、開戰初期の空虛なる防空組織

一九四一年七月十二日防衛總司令部が編成せられ防衛に關して東部、中部、西部、朝鮮及び臺灣各軍を統轄指揮する樣になる迄統一した計畫指揮の組織を持たなかつた。

軍港及び主要港灣附近の陸上及海上全般の防衛を擔當する海軍に於ても陸上防衛、防空、海上防衛は夫々局地的に當該鎮守府若くは警備府が擔任し其の間統一組織を持たなかつた海上作戰と本土に近接する水艦群に對する積極的航空反撃作戰は聯合艦隊司令長官が擔任して居た。開戰時に於ても島嶼間、地位的戰略優位を過信し米空軍の一部が潛入的に來襲することあるを考慮して之に對する防空を重點としたものであつた。而も其の兵力たるや素質訓練不充分な高射砲部隊（三五〇門）飛行機部隊（一九二機）を以て京濱、阪神、北九州、名古屋の要域及海軍根據地を防空せんとするものに過ぎなかつた。民防空の施設、訓練等は殆んど見るべきものがなかつた。

荒木光太郎文書 720

俄然一九四二年四月十四日本軍艦隊航空部隊に依り帝都を急襲せられ防空上の缺陥を露呈した。急遽防空の應急強化を急いだ。即ち防衛總司令官の指揮下に第一航空軍司令部と防空專任飛行團三個を新設し、更に走を防空兵團に擴充し防空氣球を增設し電波警戒機の配置を促進する外大口徑高射砲の製作、電波標定機の研究を急ぎ又訓練と戦法との改善に努力した。

一、米機動艦隊とB29の智戦に對する防空對策

一九四二年六月五日「ミッドウエー」の海戦に敗れ我が機動艦隊の精鋭主力を失ふに至つたので米軍機動艦隊に對する太平洋方面の防衛は不安を增大した。間も一九四三年四月米國は對日本本土空襲のため戦略爆撃機B29の製作を開始したとの情報を入手し次で一九四四年「マーシャル」群島を失ひ中部太平洋方面に對する米軍の反攻意図を告げるに至つたので本土の防衛強化の要は愈々切實なる問題となつて來た。

大本營は一九四四年二月下旬B29の國土攻撃基地として米軍の攻撃目標となることを必至と判断せられる「カロリン」及び「マーシャル」小笠原群島に陸軍兵團を增強し新に第三十一軍戦闘序列を下令して之を陸軍長官の指揮下に入れ同長官が是等一連の群島國防圏を守備せしむる様措置した。又航空基地の設定を急ぎ第一航空艦隊一一八二機を此方面の作戦に當らしむることとし此方面に邀撃態勢を採つた。其の外臺灣及び南西諸島方面にも戦火が波及することを考慮し一九四四年三月下旬第三十二軍の戦闘序列を下令し南地區の航空基地を增設すると共に一部の地上兵力を增強して基地の確保に當らしめた。千島群島にも一部の兵力を配備した。五、六月には南西諸島に一般師團二個、臺灣に一般師團一個、飛行師團一個を增強し第三十二軍を西部軍司令官の隷下に入れた。更に國土の警備を強化する爲一九四四年一月には各鎮守府隊を編成し警備組織を確立した五月には防衛總司令官の東部軍、中部軍、西部軍に對する完全統帥

を認め第一航空軍を其の指揮下に入れ米軍の國土空襲破摧の外離島及國土沿岸の防備強化と米海軍を撃摧すべき任務を與へた。新嘉坡方面に於て戦力保存に努め且に海軍全海上部隊は第一機動艦隊司令長官の指揮下に入れ作戦準備を完成した。又本土防空を強化する爲仮同防空專任部隊を海軍より轉用し教育部隊として5FDを新設する外内地の防空飛行團の一個を飛行師團に擴充し夫々防衛總司令官の隷下に入らしめ國土防空基地網を擴充した。防空總司令官は東部、中部、西部各軍に夫々10FD、11FD、12FDを指揮せしめた。尚陸軍航空總監麾下陸軍航空本部長の隷下部隊をも随時に防衛總司令官の指揮下に入れ更に横須賀、呉、佐世保方面海軍航空隊の防空專用戦闘機隊を防空作戦に關して防衛總司令官の指揮を受け陸軍防空飛行師團と同様夫々其の方面の軍司令官の指揮を受けることとし一元的防空作戦の指揮組織を強化した。之と略〻同時に本土に來攻を豫期せられた米機動艦隊反撃のため8FD及1FDは夫々同方面に在る海軍航

空艦隊司令長官の指揮下に作戦することとなり航空反撃作戦の統一指揮も確立せられた。防空戦闘部隊の訓練、軍官民防空組織の確立訓練を急いだ。所の様な努力に依つて一九四四年六月頃に於ける本土防空兵力は陸海軍を合し飛行機九一〇機、高射砲六五〇門に達し指揮組織設備、素質、訓練も漸く面目を改めて來た。

以上の様に國土防衛の準備を急いで居た矢先一九四四年六月十五日支那成都の基地からB29一〇〇機が北九州に來襲した。事前に之を探知し其の七機を撃墜し得破害も微少であつた。

三、「サイパン」の失陥と本土防衛對策

既述の様に「マリアナ」「カロリン」群島の防備強化に努力しつゝあつたに拘らず一九四四年七月には「サイパン」を初め其の重要なる島嶼を失陥した。百民衆が此の不幸なる戦況と次に來るべき事態とに感悲し憂慮した。七月十八日東條内閣は退陣の止むなきに至つた。

而も此の日は「マリヤナ」海戦に敗れて海空戦力の精鋭に甚大なる被害を被つた。特に海軍部隊の大半を喪失したことは海上作戦の遂行に大なる支障を与へ國土の危機は急轉直迫するに至つた。

本土は今や米空軍戦略爆撃群と機動艦隊の攻撃に曝されただけでなく米地上軍の國土進攻をも現實の問題として用意せなければならない事に立ち到つた。

即ち從來防空を主眼として來た國土防衛は國土に於ける日米地上軍の決戦をも豫期し之に備へねばならない事になつた。

此の重大なる事態に對處するため大本營は一九四四年七月、比島・臺灣、南西諸島、本土千島に亘る最後の國土防衛線に於ける米軍との決戦を計畫し米軍の來攻を遮へ陸、海、空三軍の戦力を結集し雌雄を決する準備を急いだ。この「作戦を捷號作戦」と名づけ比島方面の決戦を「捷第一號」、臺灣南西諸島方面の決戦を「捷第二號」、本土方面及千島、北海道方面の決戦を夫々「捷第三號」「捷第四號」

と呼稱した。此作戦準備に依つて猶再編途上に在つた全海上部隊は此の決戦に參加するに決し第一撃部隊（B五、C、一二D、二〇基幹）は新嘉坡方面より、又機動部隊（母四B二C、二D一〇基幹）は第二撃（C三D一〇）と共に内海方面より夫々米軍の上陸點に進撃すべく準備を整へた。南西諸島には七月下旬一般師團二個を、臺灣には七月末より八月初めに亘り一般師團二個を増強し32Aを再び臺灣軍の戦闘序列に編入した。小笠原群島に對しては大本營が守備集團を直轄して一部の歩砲兵部隊を、伊豆諸島には混成旅團三個を夫々増強した。内地防衛を強化する爲七月上旬には内地各軍管區に戦時警備を下令した。當時に於ける米軍の戦略企圖を一は比島攻略後支那沿岸に基地を獲得して本土進攻を準備する場合と、一は臺灣又は沖縄を攻略後日本本土西部地方に進攻する場合と、更に他の一は小笠原諸島を攻略して直路本土の東部に向ふ場合の三案を豫想して先づ來攻米軍に對する攻勢支撃の骨幹を構築する次の様な本土築城計

荒木光太郎文書 720

蓋を立てられた。

本土の地上防衛兵力は前述第三十六軍の外は國内常駐師團及要塞守備兵力と轉用隊定の一部東滿兵力に過ぎなかつた。而も國内常駐團は外征部隊の教育、補充を適當しある關係上本土に充當る兵力を自主的に確定し得ない實情に在つた。從つて本土地上防衛の急を自覺しつゝも其の計畫は抽象概念的であつて築城等の準備も遅々とし又一貫した思想を欠いてゐた。

一九四四年六月計畫セル本土築城計畫ト同年末進捗實績表

軍管區別	地區名	構築計畫量	緩急順位 第一次	緩急順位 第二次	緩急順位 第三次	一九四四年末ノ進捗實績（第一次計畫ニ對スル比例）
防衛總司令部 東部軍	八戸平地	i 三大	○			10%
	仙臺平地	i 一大半			○	
	伊豆諸島（八丈島、新島、大島）	i 二大	○			60%
	關東地平 水戸平地	i 二大				
	關東地平 相模灣沿岸	i 三大				SA 陣地ノ一部概成セルノミ
	關東地平 能島灘沿岸	i 五大				
	關東地平 九十九里濱沿岸	SA 五〇	SA○ 陣地ノミ	i○ 陣地概成		
	關東地平 伊豆半島	SA i 二〇 一大				
中部軍	豐橋平地（伊勢灣ノ部）	SA i 三〇 五大	SA○ 陣地ノ一部	○		10%
西部軍	和歌山附近	i 二大			○	
	高知附近	i 三大		○		15%
	南部 宮崎平地	i 二大		○		40%
	九州 大隅、薩摩半島	SA i 二〇 六大	SA○ 陣地ノミ	○		50%
	福子島	i 一大半	○			

備考

第一次計畫ハ一九四四年六月ヨリ一九四五年三月迄ニ概成シ第二次第三次ハ之ニ引キ續イテ實施スル豫定計畫ナリ

○ハ其ノ順位ヲ示ス

七七月下旬第十一、第十二飛行師團を編成し防空兵力の骨幹とし航空關係各實施學校を教導飛行師團五個に改編し教導航空軍司令部を新設して是等の飛行師團を指揮せしめ本土方面の航空作戦を主擔されることゝした。此の教導航空軍は十二月に第六航空軍に改編し防空總司令官の隷下に入れ防空を除いた進攻及び水軍に對する上陸作戦準備を命じた。

各海軍第二航空艦隊を九州地區に配備し比島方面第一航空艦隊と共に決戦準備に就いた。

別に關東に課備兵力として第三航空艦隊を配置した。本土防空兵力は以上の推移を通つて一九四五年三月頃には飛行機は陸海軍を合し約八二〇機、高射砲は約一八〇〇門に達した。國土防衛組織は上述の態勢を通つて發展し一應の形態は整へて來たが常に米軍の反攻速度に立ち遅れ之に追隨して來た。從つて一九四五年初頭比島方面の戦局重大化して國土決戦の新段階に突入した頃に於ても防衛の實質

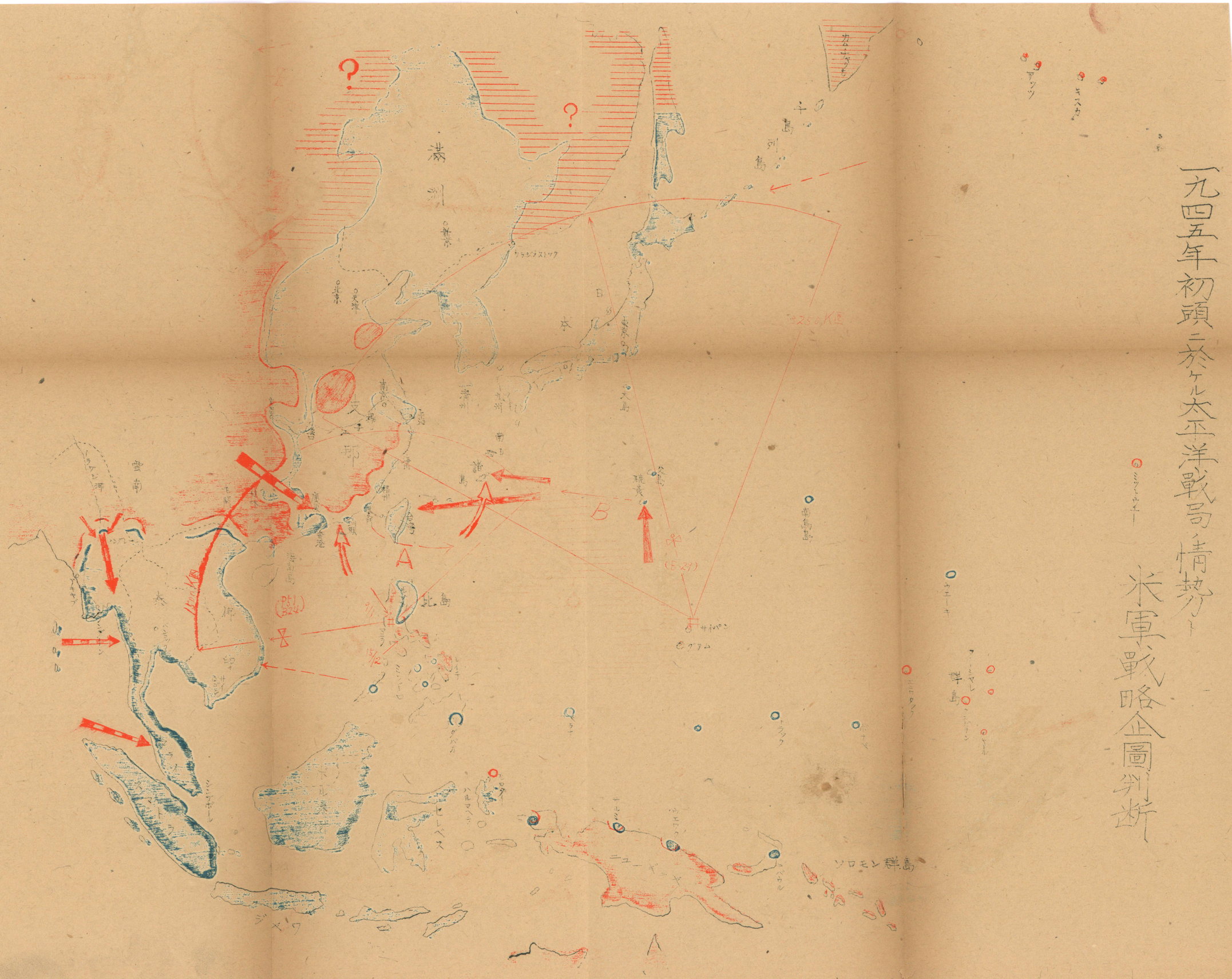
的内容即ち軍官民一致の國土決戦の認識、氣構へ、態勢の確立作戦部隊の兵力充足、對上陸作戦戦法の策定、訓練築城の整備、編成装備の充實、防空施設、補給施設の強化等の作戦準備は未だ貧弱なる實情に在つた。

第二節　一九四五年初頭の日本に於ける一般情勢（要圖參照）

第二節　一九四五年初頭の日本に於ける一般情勢

新戦局に對處して終戦時に至る間本土を繞る決戦準備を如何に構想し準備し指導し進捗したか、又其間本土を繞る戦況は如何に推移し次節の敗戦段階に入つて行つたかを記述せんとするものである。

一九四五年初頭ニ於ケル太平洋戰局ノ情勢ト米軍戰略企圖判斷



荒木光太郎文書 720

大本營が陸海空三軍の精鋭を基げ戦勢の挽回を此の一戦に賭けて敢行した「レイテ」の決戦は一九四四年十一月下旬に主つて其の敗勢は決定的となつた。そして聯合艦隊及び陸海航空精鋭戦力を失つてしまつた。

而も米軍は呂宋の「ミンドロ」島の占領を固める餘裕も與へず一九四四年十二月十五日には「ミンドロ」島に、一九四五年一月九日には呂宋島に矢繼ぎ早やに反攻して來た。

山下奉文大將の指揮する比島第十四方面軍は「バギオ」の山領に據り持久戦法に採りつゝあつたが戦力の懸隔は米軍に對し有數なる反擊、海東、出血の戦法を強要する事を期待し得ない狀況に立ち到つた。斯くして東南支那海は廣く米海空軍の制圧する所となり本土は南方勢力圏から孤立し大陸との交通も危險率を増大した。

米軍の「マリアナ」方面航空基地の整備は進捗し一九四五年二月頃にはB29一八〇機を數へ本土に對する本格的戦略爆擊が開始せられ其の

規模は逐次增大した。加ふるに米海上機動部隊は二月十六日大擧して東地方に襲來した。

一九四五年一月の來襲機數は約六〇〇機であつたが二月は一躍約三三〇〇機に達した。「マリアナ」基地米航空部隊及米艦隊の小笠原群島特に硫黄島に對する偵察、爆擊、砲擊は益々活潑となつて來た。硫黄島に對する米軍の眞劍なる反攻企圖が濃厚となつて來た。

緬甸方面に於ては戦線は中部緬甸に轉移し印支「ルート」の遮斷逐次困難となり各兵團の戦力も極度に低下し次期會戦の見通も亦危まるゝ形勢に在つた。

其の他の戦線に著變は無かつたが支那大陸を基地とするB29の滿洲、九州方面主要工業地帯に對する爆擊は前述「マリアナ」基地航空部隊の國土爆擊と相俟ち更に海上交通の遮断、工業の分散疎開等も加り日本の戦時生産は急激に微を示し、空襲の急速なる損耗と南方資源からの孤立は遂に帝國の國力は破滅界に達せんとする情勢に立ち到つた。孤

此の情勢に對處する爲一九四五年一月三十五日最高戦爭指導會議に於て「決戦非常措置要綱」を議定した。即ち日滿支の要塞に亘る國防圏を確立する非常措置を遂行し物心の全力を總動員結集し戦爭を貫遂する態勢を急速に確立せんとするに至つた。

其の經濟（）畫の骨子は航空機を初め特攻兵器、防空火器、液体燃料、食料、船舶の増産を重點とした、之を遂行する爲、大陸資源の急速輸入と南方特殊資源特に航空燃料と「アルミニウム」、錫、「ゴム」等の緊急輸送を企圖した。

斯かる措置に依つて一九四五年度に於て飛行機四萬機、鋼材四百萬噸（内普通鋼材二百萬噸）石炭五千五百萬噸、「アルミニウム」十五萬噸、液体燃料二百萬噸、船舶一九五萬噸、鐵道車輛約八千輛、自動貨車五五〇〇輛の生産を期待し是等生産施設の分散、地下移動を計畫した。而し乍ら此の計畫遂行の基本を成す海上輸送所要量は陸海作戦用四〇萬噸を合し最少限一四〇萬噸を必要とするに拘らず實情は一月の

保有稼動船舶一二五萬噸内外に低下して居た。今後臺灣、南支、南西諸島方面への戦火波及と爆撃に伴ふ被害の増加を考慮せば更に現保有量の急速なる減少と計畫遂船の停滞を伴ふ事必至と判断せられ燃料を初め南方特殊資源の緊急輸送も大なる期待が持ち得ない事等に原因し机上の計畫に終る虞が多かつた。

飛行機の如きも二月の生産は早くも千二百六十三機に止り一年間實績見込みは二萬機内外と豫想せられ而も下半期は燃料問題と關聯し航空戦力の維持が危まれた。

人的戦力の面は一九四四年末在郷軍人四六九萬を數へ大本營が企圖した百五〇萬人の動員には支障は無かつたが素質は從來の$\frac{1}{2}$乃至$\frac{1}{3}$程度に低下し技術兵種の補充に隘路があり而も41.7%が重要なる生産に關係して居るので兵備充足と戦時生産の兩者共相當困難な要素があつた。

國民就中大都市の住民は食糧の弱乏「インフレ」の悪化、爆撃に伴ふ不安と疎開の焦燥、交通の逼迫等身邊の急に忙殺焦慮し道義を蝕ばま

荒木光太郎文書 720

る傾向を示し又大本營及政府が決戦の決意と必勝の確信とを強調宣傳した「レイテ」決戦の大敗、北海戦況の不振等は官民の大本營及政府に對する信頼の念を動搖せしむる感かあつた。

以上の様に本土を繞る戦局と國内の情勢とは刻一刻急迫しつゝある時獨軍が西部戦線に於て敢行した最後の必死の反攻は失敗に歸し次で一九四五年一月中旬には東部戦線に於て「ソ」軍の強烈なる冬季攻勢を受け獨軍の敗勢は既に決定的段階に入つてゐた。當時戦爭遂行能力が最高潮に達して居た米國は近く實現すべき對獨戦爭の終結と睨み合はせつゝ大東亞特に日本本土攻略の爲極めて優勢膨大なる戦力を太平洋方面に導用し得ること而も其の着手は數ヶ月後に迫つて居ることが豫見せられた。

米國が上陸用特殊船舶、舟艇、大型航空機、戦車、火砲、小火器、自動車、海軍用「ロケット」兵器の増産を急き或は計畫しつゝありとの

情報は前述の諸情勢と相俟ちて密かに米國が日本本土攻略の大規模の準備を進めつゝあることを示唆するものであつた。

一九四四年十一月九日「ルー」大統領四選の日をなし「ソ」聯首相「スターリン」は「日本を侵略國と見做す」旨言明した事は「ソ」聯が近い將來に対戦する爲の伏線と判斷せられ北邊及大陸正面に對する戦備の急を加重した。

大本營は斯の様な諸情勢を仔細に檢討したる上米軍の次期戦略企圖を概略次の様に判斷した。

其の要旨は二月十七日最高戦爭指導會議に於て確認された。即ち

米軍は兵力を太平洋に集中し其の優勢なる物的戦力を駆つて太平洋全域に亘つて徹底し大空海作戦を推進し強引果敢なる攻勢作戦を採り日本本土を完全に孤立せしめ且其の戦爭機能及び物心兩戦力を疲瘁せしめつゝ速かに本土の要域に上陸作戦を敢行して戦爭の早期終結を企圖するであらう。又「ソ」聯の參戦に導入すべく畫策するであらう。之

荒木光太郎文書 720

が爲先づ比島作戦の早期完了を期し對日攻勢の基地とすべく其の迅速なる發展を圖ると共に其の進捗と睨み合はせ次期作戦は次の二案の何れかを選び對日攻勢基地を推進し八、九月頃本土に對する包圍進攻態勢を確立する如く努めるたりゝ。本土に對する爆撃を今後加速的に激化し大陸との海上交通を分斷し日本の物心戦力の衰弊を策する事必至である。更に日本の國力及び戦力の推移に依つては三、四月頃より米機動艦隊を以て本土を攻撃し六、七月頃本土に上陸することもあり得る。尚更に早期に先づ佛印に上陸することも一應警戒を要する。

(A) 案　航空基地獲得のため先づ南支那海（仙頭、香港地區）に次で南西諸島に向ふ計畫であつて其時機及兵力は前者は三月下旬以降、米軍三乃至四個師團、英濠軍約三個師團を以て、後者は六月以降五ヶ師團内外を以て遂行する。

(B) 案　日本本土攻撃の海空基地を獲得するため先づ小笠原群島を、次で臺灣、南西諸島を攻略する計畫であつて其時機及兵力は前者は既に決行の時機が近迫して居るものと觀察し、後者の中臺灣に對しては三、四月頃四個師團内外を以て、南西諸島に對しては直路來攻の場合は略同時機、臺灣經由の場合には五、六月頃進攻する。

上述二案の中(B)案の企圖に出る場合が多いと判斷した。其の理由は米國が對日戦の早期終結を企圖して居る樣に觀察せられ一方硫黄島父島に對する航空機、艦船の行動が逐日活潑になつて來たからである。

尚本年夏秋の候には「ソ」聯が參戦し滿洲、北支、樺太、千島の正面に攻勢を採ることあるを一應豫期せねばならなかつた。尠くも米軍に對し「シベリア」に航空基地を設定利用せしむる等を考慮する要があつた。